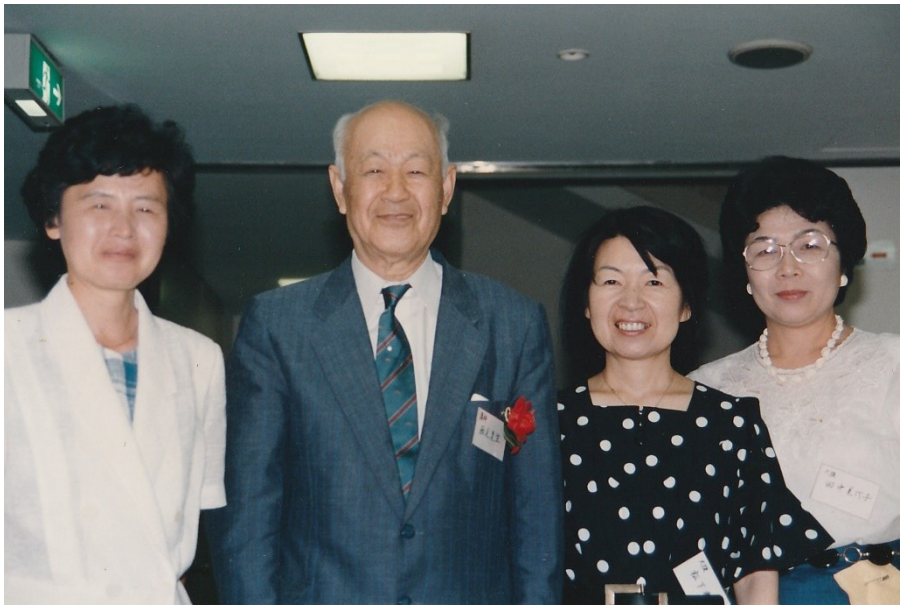


# 静坐の友

先人を偲ぶ

西元宗助先生を訪ねて

事務局 松端 孝元



田中美代子

松下 豊子

西元先生

岸 政子



季刊 58号

静坐の友社

編集発行人 松端孝元

〒五九六―〇〇〇二

大阪府岸和田市吉井町一―二〇―四

FT AE XL 〇七二―四四四―五九七五

携 帯 〇九〇―三六二九―二二五〇

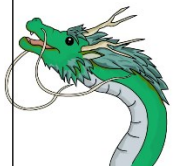
予想外の出来事ばかりが起こる昨年でした。今年はどうか平穏な年でありますよう祈るばかりでございます。

二〇二一年(令和三年)は、予期せぬコロナ発症のため、集会等が軒並み中止となりました。そのため、各地各所でそれぞれが独自に静坐を続けざるを得なくなりましてがそんな中、京都静坐会の大野雄亮さんの主催でオンライン静坐が始まりました。ニューヨークの名倉先生を指導者としてズームでの静坐です。新しいスタイルとして大いに歓迎するものです。

同時に始まったのが「先人を訪ねて」のシリーズです。個々人だけの実践ではどうしても不安に駆られます。仲間や指導者が必要です。そんな時、先人のお話や実践例は暗夜に光です。大いに勇気づけられます。

先人を偲ぶシリーズの最初は、この「静坐の友」発刊にあたり全面的に、財政的ご援助をいただいている尾上勝彦様のご尊父尾上壽作氏を尋ねましたが、それ以降、今日までにもう八人の先輩・先生方の足跡を訪ねています。改めて、今日、こうして我々が静坐を実践し、充実した生活が送れているのもこんな偉大な多くの先人、先生方のお陰があったのだとつくづく感じさせられます。

毎号誰を訪ねればいいのか思案に暮れますが、今月号も松下先生や中谷先生に相談いたしましたところ不思議なご縁で、西元宗助先生に出会うことができました。もとより私は西元先生を直接存じ上げておりませんし、紹介する写真もありません。そんな時、松下先生からご紹介を受けました高槻市の田中美代子さんから西元先生のお写真をお借りすることができました。田中さんとお話してましたら、以前、私が今、住まいしています岸和田市の吉井町に住んでいたのになつかしいのです。というお話です。「エエ！」とびつくりするとともにご縁って本



当に不思議なものだと驚いています。

西元先生を取り上げると決まってから掲載記事を探すため、古い静坐誌をめくっていきますと毎号のように記事が載せられていました。改めて、先生のすごさが身にしました。

田中さんから送られてきた写真に添えられていた田中さんの添え書きとそこから分かった西元先生の略歴をお知らせします。

先生と私は出身が同じで、いろいろなお話をして下さいました。本を出版される度に送っていただき、いつも「ここに」とお話をして下さいたことは私の一生の宝物です。

田中美代子

明治四十二年 鹿児島県で出生

大正七年

京都大学文学部哲学部卒業  
後教職に就かれ最後は京都府立大学の名誉教授

昭和三十五年

ペスタロッチ賞を受賞

昭和六十二年

西本願寺名誉総裁賞を受賞

平成二年

十二月十三日八十一歳で逝去

「歎異抄的世界」、「念仏者の人生論」等、著書多数発刊

静坐は足利浄圓先生に師事

西元先生に関係する記事を静坐誌の中から拾ってみました。

平成四年七月第百二十二号より

平成四年一月十二日初静坐会座談録から

松下 年頭にあたり、新たな気持ちで坐りたいと思います。お一人ずつ静坐にかかわる日ごろの思いを述べていただきたく存じます。

国嶋 西元先生のみ声が聞こえてきたので起きましたら、テレビの対談でのみ声でした。先生からよく「固くなったら続かないよ」

続けることの大切さを言って下さったと思います。家内の大叔母と叔母が第一回の静坐実習会に出席していましたが、私も奇しくもこの会に出席していたのが写真に残っていて、静坐する者に悪い者はいない(笑)と言ってくれて、結婚することになったのです。

田中 一年一年を大事に坐してゆきたいと思っています。ご近所の吉田様が静坐社で、信子先生にお茶も習っておられたことがこの程分かり「人生は小説より奇なり」と思っています。

岸(政) 信子先生の「又、いらっしやいよ」の声に励まされ静坐社に学生の頃からよく通いました。腰を立てることの大切さがしみじみ分かるようになりました。

ー以下省略ー

平成九年一月一日 静坐百四十号より

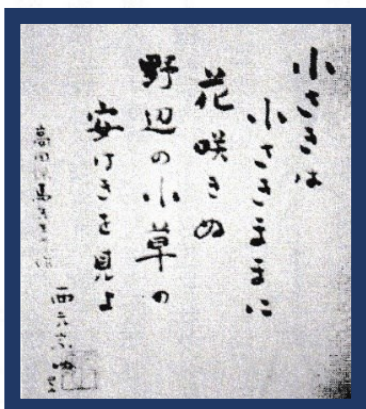
西元宗助先生をお偲びして

大阪 田中美代子

記念静坐会に参坐しますと、いつも西元先生のお顔が浮かんでまいります。いつしか歳月が流れ早七回忌をお迎えしました。

静坐にご縁を頂いた初心の頃。苦しそうな顔をして坐っていたのだと思います。先生は私の眉間に手をおおてになり、「しわをのぼして」とおっしゃいました。又、いつの日のことでしたか、お話が野球のことに及び、にこっと微笑みながら「私は阪神ファンです。」とおっしゃいました。あの時の先生のお顔がなつかしく思い出されます。

先生がいつもおっしゃった「小さきは小さきままに」というお言葉を心に刻んで、ひたすら静坐を続けていきたいと思っております。





遺稿 I

## 正しい姿勢について

西元 宗助



—ある高等学校での話—

もう十年前のことではありますが、私が長いシベリアでの俘虜生活をおえて、舞鶴に着いたとき、そのとき、非常に印象深く感じたことをまず皆さんに聞いていただきたいのであります。

それは何かといいますと、街を歩いている青年諸君の姿勢が大変悪いということでありました。すなわち将来の日本を背負うところの若い青少年の道を歩く姿が、へっぴり腰であるということでした。実は、この時ほど私は亡国の悲哀を感じたことはありません。実際、ソビエト・ロシアの青少年に比べても非常に姿勢が悪いのです。ソビエトの少年団のことをピオネールといいます、そのピオネールの誓いの言葉の中にも、「背骨を立てて真直ぐに道を歩きます。」とあります。このことを私の親しいアメリカ帰りの友人に話しましたところ、自分も同感だ。アメリカの青少年の道を歩く姿というものは、颯爽としておりして、道端に何か物が落ちておりはせんかと物を拾うような格好で歩いているではないか、というのです。

もつとも最近の青少年の姿勢は段々よくなってきたように思われますが、ともかく、この姿勢というものは、存外大事な事であり、ます。諸君、考えて下さい。なにくそと思つて奮い立つときや、それから正しいことを言う場合などにはおのずから姿勢も正しくなるではありませんか。また、国が盛んな時にはその国の青少年の歩く姿までも、しゃんとします。実はこのように姿勢というものは、私たちの心の生活と案外ふかい関係にあるものであります。

一体、なぜ、このように姿勢ということについて私がいろいろと気をくばるようになったかといいますと、実は私自身、あなた方の年頃から非常に姿勢の悪い男でありました。今でもそうですが、それに私はあわて者であります。そんなことである日、父親から言われました。「お前のようなあわて者では駄目だ。肚をつくれ。下腹にぐっと力を入れて生かせよ。」と。そこで私は、下腹に力を入れてみようとするのですが、なかなか臍の下に力が入りません。反対にお臍の上が膨れるだけです。それから、あわてるくせがなかなか直りません。落ちつこうと思うんですが、いざとなったらあわてます。これじゃいかんと思ひまして、これからお話いたします姿勢ということ、それからいわゆる肚をつくることを考え、かつ気にしてきたのであります。そして、そんなところから京都大学に入学した

ころからご縁があつて、岡田虎二郎先生の流れをくまれる小林信子夫人のもとで静坐を習い始めたという訳なんです。

考えてみますと、私たちがこの世の中で尊敬する人というのは、みんな姿勢がよいように思います。例えば近いところではノーベル賞をもらわれました湯川博士、明治時代の西郷南洲翁、それからそれ以上に私どもの尊敬しているお釈迦さま、あるいは親鸞聖人のそのお姿は、大地にそびえたつように、しゃんとしていられる。こう考えてみますと、私たちは心の修養をするためにも姿勢をきちんと正しくしていく必要があると思ふ訳であります。

それでは、正しい姿勢というのはどういうものであるか、私が教えられるところでは、一番大事な根本はなんといつても背骨、とくに腰骨を立てることであり、英語で言いますとバック・ボーンということになります。

終戦後の日本の国にはバック・ボーンがないと言われて、それが私たちの身体的な姿勢にも現れまして、腰骨が立っていないのです。皆さんは、今日の私の話のすべては忘れられてもよいのでありますが、ただこの「腰骨を立てる」ということだけは時々思い出していただくと非常にありがたいと思ひます。

あなた方は、古い言葉で「男子十五にして志を立てる。」ということをお聞きではないでしょうか。立志ですね。男はみな十五・六歳

から二十五・六歳にかけまして、この一生涯に何をしなくてはならないかという志を立てることが大事であります。その志を立てるといふことは、身体的にいうと、腰骨のたった人間になるということでもあります。

札幌農学校におられました、あの有名なクラーク先生が「ボーイズ・ビー・アンビシャス」(少年よ、大志を抱け)と言われましたが、それはどういふことであるのか？それは、ただ今言いました腰骨を立てるといふことであります。

大変、失礼ですが、いまイスに腰かけられたまま、できるだけ腰骨を立ててみてください。皆さん、よくお出来になりました。しかし、少し窮屈そうですね。それは胸を張りすぎているからなんです。このように、イスに腰をかけるときも、坐るときも道を歩くときもいついかなる場合においても腰骨を立てるといふこと、これが人間には一番大事だと思います。ただ、腰骨を立てるといいますと、ともすると身体全体が固くなりがちですが、そうではありません。腰骨を立てながら、しかも胸、肩を張らないことが大切であります。昔の軍隊流の姿勢では肩をウンと張るようであります。あんなに肩を張ってはいけません。肩を張っているのは、りきみかえっている証拠であります。空威張りにすぎません。

そうではなくて、ごく自然に肩の力を抜くことが大事であります。それから次に大切な

ことは「あご」を少し引くことであります。私は顎が出がちなんです。少し引きかげんの方が良いのです。それからお臍の上の方がふくれないようにすることです。上腹がふくれていると人間は駄目になります。

皆さん、よく「腹が立つ」といいますね。腹が立つということは臍の上がふくれているという姿であります。立腹するようじゃ困るんであります。私自身、何か不平不満なことがあるあります場合、お臍の上をおさえてみますと、プクンとふくれています。やっぱいいかんどぞと思います。世間では、お肚に力を入れると言いなながら、お臍の上の方をふくらしている人があります。そうではなくて、臍の上、上腹を柔らかくして、あとで述べますように、正しい静かな呼吸を念入りにするのですね。そうすると、おのずから下腹に力が入るものです。禅宗では、臍下丹田に力を入れる、といいますが、はじめはなかなかこれできません。それよりも、腰骨を立て、肩の力を抜くこと。臍の上の上腹のところを力を入れないこと。そうして正しい静かな呼吸を力を入れてすること。そうすると、おのずから下腹に力が入るようになるものであります。しかし、一挙にはまいりません。その要領を会得するためには私の経験では、静坐を習って、どうしても毎日三十分、できることなら一時間位坐ることが大切だと思うのです。

次に呼吸のことを申しましょう。世間の人々は呼吸というのと、吸うて吐くものだと考えています。しかし、このような呼吸は誤りでありましょう。呼吸という文字からしてもお分かりだと思えますが、呼吸は吐くことが主体であります。そしてこれは、古代のインドから現代に伝わってきている正しい呼吸のあり方であります。

きょう皆さん方に聞いていたただきたいと思っておりますことは実はたったこれだけあります。(丁)

(小林信子先生喜寿記念刊「静坐への道」より)

## 遺稿II

### 信子先生とご仏縁

西元 宗助



(一) そのご葬儀前後のこと

かねてご病気であられた小林信子先生は、昭和四十八年三月二十五日、ついにこの世を去られた。私は信子女史には、随分お世話になった。殊に学生時代以来静坐をご指導いただいた御恩は骨身にしみて有難い。お陰で私の背骨は少しはシャンとしている。下肚にも少しは力が入るようになり、おのずから達者にもなった。生来、虚弱で姿勢の悪かった私。それを懇切に、あきれもされないで導かれたのが



女史であった。それだけではない。かえりみれば、恩師足利浄圓先生との勝縁も、金子大栄先生との縁も亦、信子先生の静坐社によるところが大きい。まことに女史は静坐の人であると共に聞法求道の人であられた。いな、静坐人である故に、真の聞法者であられたといふべきであろうか。

○

信子女史のご葬儀は、その遺言によって、山口益(すすむ)博士の導師のもとに万事執り行われた。いうまでもなく先生は文化功労賞を授与された仏教学の世界的な学者、しかもご老体であられる。それで私たちは、先生を煩わすことの少ないよう、たとえば蓮華台の火葬場にいったただくことなどは遠慮申し上げるつもりでしたが、先生は自ら仰せになつて万事をひきうけられ、それは、それは懇切鄭重であられた。

殊にその初七日のご法事については感銘が深い。遺族のみどり夫人(当時京都府盲学校教諭)から電話でご相談のあったとき、わたしは夫人に申した。これ以上、山口老先生をお煩わしすることは、あまりにも勿体ないと。それというのも、夕闇迫る寒空の蓮華台の火葬場に立ちつくしておられた老先生のお姿は、あまりにも痛々しくあられたから。ところが折り返し、みどり夫人からまた電話があつて、ただ今、山口先生から勿体なくも直接お電話がございました。初七日も自分がお参りさせてい

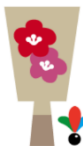
ただくとの仰せ、については先生もまげてご出席くださいませんかとのこと。私も静坐の仲間、みどりさんご夫妻ら遺族の方々の長い間の看護に引き続く葬儀によるご疲労のことを察して、初七日は遠慮することにしていただいたのですが、こんなことで特におまいりさせていただくことになった。

さて当日当夜、定刻より早めにお出になつた老先生を応接間でご接待しているとき、みどり夫人が「先生、うちの母(信子先生)は、ご存じのように晩年、脚の骨を痛めて松葉杖をつき、そのうち目まで見えなくなつてしまひ、ホンに業が深いと思つておりましたが、本当に業が深いのは、私の方でございました。そのことに漸く気づかせていただきました。私は、この業を果たすために懸命にとめなければと思つております。」とおっしゃると、山口先生「業を果たすために一生懸命つとめると言われるが、それでまた業をつくつていくばかり。」と仰せになつて、あたたかく微笑された。みどり夫人は勿論、私たちもお言葉に深く傾きながら、一生造悪値弘誓の正信偈のお言葉を想い浮かべて慚愧し、かつは感謝したことである。

さて、その夜の先生のご読経はまた懇切鄭重で、あたかもみ仏ましますのごとくでありました。

## (二) 先生との縁

信子先生のご恩には、計り知れぬものがある。



もし信子先生の静坐社がなければ、私はついに静坐することがなかったかもしれない。そして早死にしていたかもしれない。早死しなくても虚弱に生涯を過ごしたことは間違いないであろう。顧みれば、京都大学に入学した昭和四年の春、私は神戸の中学生時代からの知己である先輩の曾我了雲(当時、新作)兄に紹介されて、当時、東山の松原町にあつた静坐社に参つたのが最初のご縁であつた。

その前、私は郷里鹿児島島の旧制高等学校(七高)の生徒時代、坐禅のまねごとをしていた。また岡田式静坐法のこと書物によつて知り多少は独習していた。それというのも、私自身、はなはだ落ち着きのない神経質な、そわそわした青年であつたので、尤も今もその傾向は多分ある。どうしても「坐」ということに関心を持たないわけにはいかなかった。

ところで、信子先生の前に瞑目して坐つてみて、私の我流の坐り方の、ことごとくが間違つていたことを信子先生からやさしく、しかもきびしく指摘されて、全く目の覚めるものがあつた。

まず腰骨をしつかり立てねばならぬこと。私は下肚に力を入れることばかり考えていて、腰骨を立てることを知らなかった。しかも下肚(丹田)に力が入っていないで上腹が固くなつていたのである。それに上半身が硬直して肩の力を抜くことを知らなかった

のである。このようなことのため、私は最初の一年は、独習時代の悪い癖を矯正するのに苦勞した。いや、私が苦勞したというよりも、信子先生がご苦勞になられたというべきである。ともかく当初、私は一度も褒められたことがない。先生は、いつも情けなそうなお顔をなさりながら、それでも「どうか、続けてくださいね。」とやさしく仰せになった。

私は師友に恵まれていた。わが師、足利浄圓先生も偶然、静坐の同人でありであった。信子先生も仏法においては、浄圓先生を師として仰いでおられた。そう申せば金子大栄先生にも。また、すでに述べた曾我了雲兄もそして、畏友酒見敏夫君も、京大哲学科では机を並べた仲間で、二人とも案外の早世が惜しまれる。寿命というものは、どうにもならぬもののあることを思わしめられることである。

つくづく思う。私は凡庸なる故に、特に落ち着きのないソワソワした性格の故に、ともかく怠けながらもどうしても静坐をしないわけにはいかなかった。それに、時に静坐社でみんなとともに静かに坐っていると、太古から今に続く、永遠の静寂とでもいうべきものを、フツと感ずるひと時のあることである。私はこの永遠の寂さ(しずけさ)を求めて、今日も静坐をさせていただく。

○ なお、信子先生をお偲びするよすがに、多

分どなたもご存じでないであろうことを一つ付記しておく。

それは昭和四十四年夏、ハワイ巡遊の折、ホノルルの西本願寺別院の総長室に、明治三十九年当時の開教総長今村恵猛(えみょう)先生と共に撮られたドクトル小林参三郎、信子ご夫妻の若かりし日のお写真が飾ってあることを知り、拝見したことである。

当時小林ドクトルは新婚の信子女史を迎えてマウイ島にて医院を開業する傍ら、西本願寺初代のハワイ仏教青年会長として活躍された、その記念のお写真とのこと。当時、足利浄圓先生も開教師として、ハワイに駐在しておられたので当時から親交がおりであったことも不思議なご縁。なお、浄圓先生は明治三十九年、小林ドクトルご夫妻は明治四十一年夏、それぞれ日本に帰国されたと承わる。因縁また不可思議である。

(静坐社創立六十周年記念文集「静坐の道」より)

### 遺稿Ⅲ

#### 初心にかえる

西元 宗助



○ 只今ご紹介いただきました西元でございます。私

は時々世間の人から仏教学者と間違えられますが専門は教育であります。その教育の

立場から、稽古ごとの基本的なことを少し申させていただこうと思えます。

昨日も柳田先生が仰せでありました。「静坐の道においても先生が大事である。」とまさにそのとおりでありまして、あらゆる稽古ごとにおいて、特に一番最初に本当にいい先生につくということが大切なことでもあります。ただ、そこで気をつけねばならないのは、一人の先生につく。しかし、その到達点においては、真に一人の先生を尊ぶが故にこそ、かえってあらゆる先生を、人々を、尊ぶ心境がひらかれてこなければならぬのでありまして、これも大事であります。

世間では、ともすれば、自分の先生を尊ぶあまりに、他の流派他の先生をむやみにくさがちであります。というのは、人間には我執があり、殊に法執がございますから。これが厄介な問題であります。しかし、足利浄圓先生や金子大栄先生が仰せになりましたように、本当に弥陀一仏に頭の下がる境涯には、おのずから一切の諸仏に頭の下がる世界が開かれてくる。こういうことになるし、また、ならなくてはならないのでございます。

第二には、あらゆる稽古ごとにおいては従って静坐もそうであります。が、年がかりが必要であります。十年、二十年と。本当のことを申しますと一生涯。もうこれでよいということはない。これはすべてのことに通じてあります。これはすべてのことに通じてあります。それが、ともすると三、四年で、

もうこれでよいとなる。どういう人がやめるかというところ、案外素質の良い人、頭のよすぎる者で、「ああ、わかった。」と、こうなってしまうがち。

私の友人で、皆様も多分ご存じでやはり立派だなあと思うのは、例えば、ソニーを作った井深大や映画俳優の山村聡。このお二人とも神戸の小学校中学校で、一緒です。しかし、お二人とも青年時代は決して順調ではありませんでした。もちろん優等生ではありません。それが却ってよかったのではないかと思うのです。それに反して、褒められて素質がよいとされたもの、いわゆる優等生は案外に、その後、伸びていないように思われる。その点、たとい出来が悪くても、のろまであっても、十年、二十年と、亀の子のように根気よくコツコツやるものが意外に伸びている。

それでは年数、年数さえかければよいのかというと、必ずしもそうとは言えません。どうしてもマンネリズムに陥ります。実際、稽古ごとをして、あぶないのは三年目、四年目でしょう。いや、もう少し早い時期かも知れません。ともかくすぐ教えたがります。心得顔になる。そこに人間のスキができます。慢心が生じてマンネリズムにスランプに陥る。

学習にとって大事なことはこのマンネリズムの高原—プラトー (plateau) を如何にして突き破るかです。その際、ともかく一度原点

にもどって初心に帰り一心不乱に打ち込んでいく。

人間は、殊に我々常人には、いつも緊張して打ち込むということはできません。しかし、ある時点においては、命がけで一心不乱にやる。そして我すでに得たりと思うものを、打ち壊していく。そして根源からもういっぺん出直して出発する。これができるかできないかが、分かれ道であろうかと思うのであります。

私どもの教育学は、人を教育する教育学ではなくて、この私という欠点だらけの人間が教育されていく教育学であります。したがって、本当の教育者は仏様でありなんです。その立場から言えば、いま申し上げたようなことが基本となるのであります。

私はもともと体が弱く、小学校時代には、いかなご(小魚の名・細長い魚)とか、青びょうたんとか言われました。そして今でも、落ち着きのない、そそっかしい、あわて者であります。ひどい年は一年間にこうもり傘を置き忘れて十何本も無くしております。最近ようやくそのようなことはなくなりましたが本当はそうなんです。そうなんですけど、全くそのお陰で静坐をさせていただいてまいりました。

ともかくも二十年、三十年と、怠りながらもどうにかやらせていただいてまいりました。今年で満七十歳になりました。本当にお

陰様でございます。そうして、いつのまにか、老人にしては、健康優良児であると、この間も人間ドッグに入って検査していただいて褒められるようになったのであります。それから姿勢の方もいつの間にかそう悪くはなくなりました。いや、時には褒められるほどになりました。感無量でございます。

最後に、この私、幼稚園時代から中学校の頃までは、ずっとキリスト教の日曜学校から教会に通っておりました。ではなぜ仏教徒になったのか。私の場合は、キリスト教のおしえが悪いからではありません。私という人間がいたらないくて、いわばキリスト教に落第したお陰で仏教の教えを聞くようになったのであります。それでは、すぐに親鸞の真宗へ行っただかというところ、それもそうではない。坐禅のまねごとをずっとしておりました。西田天香さんの一燈園にもまいました。要するに右往左往したあげくのは、そのお陰で浄土真宗の教を聞かせていただく身になった次第でございます。それでは浄土真宗に及第したかというところ、これも今もって落第。けれども、あらゆることに落第していくという道は、案外素晴らしいんです。あらゆるものに光を感じていく世界が与えられるからでございます。

ご清聴まことにありがとうございます。

(夏の実習会でのお話静坐第七十三号)





## 編集後記



静坐誌第五十八号「先人を偲ぶ」は西元宗助先生に登場願いました。

もとより私は、先生について何の知識もございませんので過去の静坐誌をめくりながら先生の面影を偲んでまいりました。

先生が亡くなられたのは平成二年の十二月とお聞きしていましたので、何かご紹介する記事はないものかと、当時の静坐誌を見てみました。平成三年一月一日第百十六号編集後記には先生ご逝去のお知らせが載っていました。お知らせには十二月五日に児玉英一先生が八十七歳で、十二月十三日には西元宗助先生が八十一歳で亡くなったことが報じられていました。

そして、みどり先生のお言葉だと思いますが、「大打撃を受けて、なんとも言葉もなく胸苦しい程に悲しみと淋しさの極みにおります。何としたことか、これが人の世の常と、大揺れに揺れている私に、お坐りなさい。しっかりと、と、ひたすら両先生のお声が聞こえるように思われます。」と中略して最後に「両先生の追悼文のご寄稿をお願いいたします。」と書かれました。

次の号百十七号が手元にはないのでがこの依頼に呼応する如く百十八号には沢山の追悼文が寄せられていました。神戸の高橋雅子様、

奈良の中川喜彦様、大阪の前井重美様、京都の森寅三様の方々です。どなたの文章も紹介させて頂いたのですが紙面の都合上その中で知りえたく私にとつては、ありがたいことですが一つ紹介させていただきます。それは、最初の頁(二ページ)で西元先生の写真並びに紹介文を寄せていただいた田中美代子さんの文書の中で最後に乗っていた西元先生の色紙の文言がよく分かりませんでしたので、何と書いてあるのか知りたいなあと思っていましたところ、岐阜の清水淳司さんから寄せられた文書の中にちゃんとその歌の全部が載せられていました。

何ともありがたく、ご縁の不思議に感謝しながら清水さんの文書のうち関係部分だけ抜粋して紹介させていただきます。清水さんはよく先生のご講話をお聞きに行っていたようです。

先生(西元先生)は、人間のとうか、私の心の内面を全てお見通しで、あまりにも鋭く私の心の中をえぐりだすようにお話されました。私という人間は全く先生のおっしゃる通りでありましたので随分苦しくなりましたが、他方不思議なことに先生の懐に暖かく抱かれています。そのような感じも致しました。ご法話の途中、休憩されておられる部屋へお伺いし、ご本を頂いたこともありました。先生は本の裏表紙に先生独特の少し震えたような字で、次のような歌を書き添えてくださいました。

小さきは小さきままに花咲きぬ  
野辺の小草の安けきを見よ  
(高田保馬先生の歌)

私はこの歌を詠んで、西元先生の考えや、また田中美代子さん、清水淳司さんのその時の気持ちや推し量られてなんともうれしくおそらくお二人と同じような感激に包まれたような気がしました。

静坐の道は、そう簡単に会得できないかも知れませんが、今日までこのように連綿として伝えられていることを思えば、次の世代に伝えていかねばなら責任と今こうして静坐に包まれている幸せを感じます。

(事務局 松端 孝元)

～お願い～

静坐に関するご意見、ご感想、又、各地での活動状況などお寄せください。適宜この静坐誌に掲載し、全国各地の会員の皆様にお知らせし、励みにしたいと思います。

